

町名は歴史をひもとくパスワード

高岡市立博物館

I 高岡の文化遺産をめぐる市民運動

平成 23 年、高岡市は県内初の「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づく「歴史都市」に認定された。

本市では同 18 年、高岡商工会議所が中心となって、「近世高岡の文化遺産群」を世界遺産にとの一大市民運動が巻き起こった。残念ながら遺産登録への道は険しかったが、同 21 年、高岡開町 400 年祭が市民総ぐるみで盛り上がった。地域の歴史に興味と感心が沸き起こり、博物館へも市内外からの来館者で大いに賑わった。

郷土学習熱も冷めやらぬ同 23 年、「歴史都市」の認定を機に、またもや同会議所により、旧町名を復活し歴史都市高岡に磨きをかけようとの運動が起きてきた。当面は復活を目指す対象地域を、江戸時代に成立した高岡町で、「住居表示に関する法律」（昭和 37 年公布）により町名を変更した町に限定している。

II 地名は無形の文化遺産

地名にはいろんな意味が隠されている。地形や土壤、災害、人名、古語などが、その土地の状況や人との関わりのなかから生まれ、地名として名付けられた。人々はその場所を他と区別し、それを共同体で認識しあうために最も分かりやすい名を選んだ。

江戸期、高岡町に付けられた町名も同様で、一つひとつに個別の意味が籠められている。町名には祖先から引き継いできた「共同感情をゆすぶる力」がある。その名に触れるだけで 400 年余り昔のわが町のご先祖様をグッと身近に感じることができる。

III 江戸期 高岡町の成立と町名の由来

1 開町 利長在城時の町々

加賀前田家二代当主前田利長は、慶長 10 年（1605）、富

山城に隠居した。ところが 4 年後の同 14 年 3 月 18 日、町家からの出火で富山城を焼失した。利長は魚津城へ避難し、幕府と駿府城にいた徳川家康に関野（高岡）での築城の許可を求める使者を派遣し、4 月 6 日許可を得た。

同 12 日高岡城及び城下町の建設物資の陸揚地として木町建設を、16 日には木材を五箇山から伐り出すよう指示し、加越能三州より物資と人員を集めて工事を開始した。利長は魚津城から築城と開町の指示を出し、着工からわずか 5 ヶ月、9 月 13 日に高岡へ入城。武士とその家来たち 562 名を伴った。また「関野」を『詩経』の「鳳凰鳴矣于彼高岡」により、高岡と改称した。

町人たちは加越能三州をはじめ尾張、山城、近江、信濃等から 630 名余が集まった。開町時にできた町は「本町」といい、土地を無償とし、地代もとらなかった。

『高岡町由緒聞書』『高岡市史』等によると、本町 35 町のうち射水郡出身者が 23%、砺波郡 17%、婦負郡 6%、新川郡 3%である。越中国内の人々が 49%を占め、17%が越中以外、不明が 34%である。

出身地が分かる町数を 100%とすると、射水郡 35%、砺波郡 26%、婦負郡 9%、新川郡 4%、越中以外 26%である。越中から 74%の人々が来たことになる。

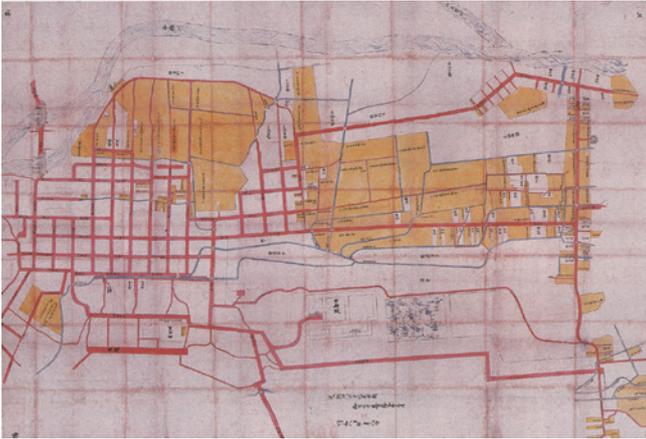


「関野之古図」（高岡開町以前の図）高岡市立中央図書館蔵

① 成立順を表す町名

一番町……高岡第一番にできた町で、射水郡津幡江村（現・射水市）の庄左衛門、作道屋助次郎が商売を始めた。

二番町……二番目にできた町で答野島村（現・国吉）の百姓平六が米屋を営んだ。



「明和8年(1771)製高岡町図」高岡市立中央図書館蔵

三番町……氷見屋長助が荒物屋、田子屋権五郎が肴屋、角屋六兵衛が油小売・蠟燭屋を始めた。

② 旧城下を表す町名

守山町……守山城の麓の守山村から、17軒が引越した。久兵衛は太物屋、千左衛門は蠟燭・油元結、権三郎は米屋を営んだ。

木舟町……木舟城（現・高岡市福岡町木舟）のあった木舟村から、善右衛門、宗三郎、四郎兵衛、三六、源兵衛など20余軒が引越した。故郷が恋しく木舟町とした。

③ 職業を表す町名

金屋町……砺波郡西部金屋村から鋳物師が召し寄せられた。（出身地も表す）

風呂屋町……近在から呼び寄せられた人々が風呂屋を始めた。

利屋町……山城より藤原源太正頼という刀鍛冶が召し寄せられた。当初は研屋町と書いた。

博勞豊町……砺波郡の戸出・石丸・徳市などより馬喰が移転してきた馬喰町と、久津呂屋与平、柳田屋清八など氷見在より引越した豊屋を始めた豊町とでできた。当初は馬喰豊町と書いた。

旅籠町……富山四方、放生津辺りから移り宿屋を始めた。

檜物屋町……新川郡大場村の百姓庄左衛門が引き移り、指物屋を始めたので、当初は指物屋町と書いていた。のち塗り物が盛んになり檜物屋町に改称した。

桶屋町……桶屋が始めて開いた。桶屋町が発展し人口が増えたため、正徳3年(1713)に下桶屋町が分離して成立した。

油町……油屋が多く居住した。

千木屋町……慶長年間、千保川の川幅が広く底も深かった。

当町は材木の集散地になり千木屋町と称するようになった。
木町……利長は築城と城下町建設の資材を調達するため、富山木町の人々を呼び寄せ、千保川と小矢部川の合流点の右岸に木町を作った。当町は運漕と材木・薪炭商売の特権を与えられた。

土器町……当町から古定塚にいたる街道沿いに多くの寺院が配置され、侍屋敷があった。町名は製陶業者がいたからと伝える。

白銀町……白銀師が居住したと伝える。

④ 人名による町名

源平板屋町……紀州長岡より源平という者一門が引き移り、紙屋、太物屋、小間物屋、仕立屋、張物屋などを始めた源平町と、放生津より六右衛門が引き移り、屋根板を売り始めた板屋町で、源平板屋町になった。人名と職業の複合により町名になった。

鴨島町……加茂嶋七郎の屋敷があった。七郎は寿永年間(1182 - 4)、関野の南部台地に住んでおり、この地の地頭であったという。

梶原淵町……高岡町が建設されたころ、千保川が庄川の本流で、川幅が広く、特にこの辺りは深い淵が所々にあって流れが渦をなしていた。この河岸へ梶原源太（鎌倉時代の武将景時の子の景季）の子孫を名乗る五郎平という者がやってきて一家を構えた。人名と地形の複合により町名になった。

⑤ 地形による町名

堀上町……堀は十七ヶ（庄方）用水のことで、当町は高岡町を通るこの用水の上にあたる。

片原町……十七ヶ（庄方）用水の北西側が町屋で、片側は武家屋敷裏の林野草原であった。

川原上町……慶長年間に旧城下（守山城）から土器町（現・大坪町）へ移住した商工人が火災に遭い、移転して川原町を開いた。魚商、肥料商、干物商、塩売捌き商などが住んだ。

下川原町……千保川沿いであって、川原町の下手になる。

坂下町……越後長岡から後藤孫之進という武士がやってきて、武道指南をしたのが始まりである。高岡台地から下がる場所に位置することから、坂下町と名付けられた。台地のあたりを坂高町と呼んでいた時期もあった。

⑥ 軍事施設による町名

御馬出町……越前より吉十郎という者がきて馬具の商売を始め、武具商人と武芸指南の町へと発展した。江戸期は大馬出町とも記された。高岡台地の西の入り口である現・高岡関野神社の一の鳥居付近は櫛形と呼ばれるクランク状の

道で、攻め入る敵の勢いを鈍らせる重要地であった。枳形の南と北には土居が築かれ、さらにその下には駒留と称する柵が設けられていた。そのため枳形から真っ直ぐ北西に伸びる当町は、大きな「馬出」(城等の出入口の外に設けられた陣地)だった。

小馬出町……現・大仏前に近い坂下町の上の方に御馬出町の枳形よりも小さな枳形があった。その下は崖になって林が茂り格好の「馬出」だった。信州上田の安元四郎左衛門が諸芸指南を始め、当初は信濃町といった。

⑦ その他

通町……この町を通して他の街道に連結する交通の結節点であった。

袋町……町の形が箸箱のように細長く、入り口が1ヶ所しかない袋小路のような状態だった。

二丁町……はじめ二時町と称したが、天和元年(1681)、二丁町に改めた。

開発町……高岡城を築くとき、築城用材木などを運搬する人々が居住する町として早くから成立した。開町当初は大掛町と称したが、寛永20年(1643)、開発町に改称した。開発木町と呼んだこともあった。

定塚町……中川の熊野神社の祖先である利長坊という山伏が、中川村の小高い山(ポンポン山)に入定し、その塚があったことによる。利長坊は「私の死後百年ののち、この世に現れ、この世を救ってみせる」と言い残した。利長は自らをその再生と信じ、この塚を保護したという。

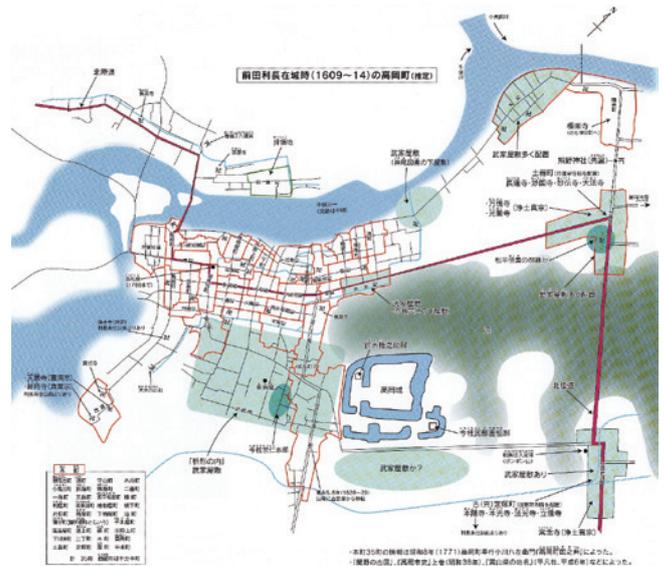
高岡城の廃城後、寛永5~6年(1628~9)頃、高岡町を通る北陸道の東半分が付け替えられることになった。小馬出町から平米町へ続いていたのが、坂下町へと右折し坂を上がって、現大仏の前で左折し、古城の大手前を経て大野へ抜ける道へと変更された。

このため、大手前(常念寺あと付近)の水堀や土塁が見透かされることを憚り、定塚町(現・古定塚町)の民家の一部を下関村領へ移転させ、また砺波郡蓮沼村から蓮沼屋五兵衛などの百姓が引っ越して新たに定塚町ができた。これを荒屋(新町とも)と呼んでいたが、いつの頃からこちらを定塚町、元の定塚町を古定塚町というようになった。

関町……高岡町の開町によって旧地名の「関野」が無くなることを惜しんで、利長が命名したと伝える。

平米町……砺波郡常国村(現・中田)の百姓長兵衛などが引っ越して開いたという。当初、平吹町と称したが、天和元年(1681)、平米町に改称。その理由は万治年間(1658~61)に役夫(公的に使役される人夫)にでるものが多く、

その代価に与えられる米をお平米といったことに因むという。
横町……町名の由来は伝わっていない。



「前田利長在城時(1609~14)の高岡町(推定)」
高岡市立博物館ガイドブック「高岡ものがたり」所収

2 利常以降の町の発展

利常死去の翌年、一国一城令により、高岡城は廃城となった。家臣団が金沢へ去り高岡町は急速に寂れ始めた。三代利常は高岡を城下町から商工業の町へと再生させるため、元和6年(1620)町人の他所転出を禁じた。さらに町政の組織を改善し、布御印押人をおき、魚問屋、塩問屋などを創設した。こうして商工業が繁栄し人口が増加するとともに、藩士の屋敷跡や百姓地を借りて、徐々に町が拡がりこれらを「地子町」といった。当初の本町35町に地子町27町が増え、幕末には合計62町となった。

3 地子町の町名由来

地子木町……最初にできた地子町で寛永17年(1640)の成立。木町が物資の集散地として栄え、人口が増大し木町の南にできた。開発町の九右衛門がはじめて来住したと伝える。

横田新町……正保2年(1645)古定塚から移転した職人が、横田村を請地してできた。

白銀後町……白銀町の南東に続く町。町の南東部に足軽屋敷があり、承応の頃(1652~55)からこの地区を足軽町といった。寛政(1789~1801)の頃には鉄砲町と通称された。

大工町・大工中町・大鋸屋町……承応・明暦の頃(1652~

58)、利長の菩提寺・瑞龍寺を建立する際に、大工や大鋸屋等が居住して町名になったという。大工町は当初、大木町と称していた。

横田町……寛文6年(1666)、高岡町に近く、北陸街道沿いの横田村に町人が多く住むようになってきた。

上川原町……川原町の上手になる。魚商、運送業、桶屋、荒物屋等がいた。

中川原町……上川原町と下川原町の間にあるので中川原町。魚、干物、肥料商、海産物商等がいた。

一番新町……一番にできた新町で射水郡江尻村の藤兵衛らによって開かれた。二番新町とともに四十物町とも呼ばれた。

二番新町……二番町某の分家の次男九郎が糶屋(米の小売商)を始め、発展したという。塩干物の干し場に恵まれ、生魚のほか塩干物を取り扱う商人が集中した。

橋番町……廃城後、藩臣の屋敷跡地に町立された。横田橋(千保川)と横田小橋(中島川)の掃除と諸事取締りをする橋番人が居住した。

横川原町……享保5年(1720)、小馬出町と下川原町の一部を割いて成立。花街となり天保(1830～)から幕末期にかけて栄え、幕末には15軒の楼が連なっていた。

立横町……道路が曲がり尺のように直角に縦横になっているのでつけられたという。

片原中島町……宝暦4年(1754)、鴨島村の一部を請地して町立された。町名は片原町に隣接し、同町の中央を流れる庄方用水が、町の西端で分岐し、町は二流れの用水に挟まれ、中の島の地形であった。

中島町……庄川の改修により千保川の水量が激減し、横田町と橋番町の間川のなかに中の島が生じたという。当町は横田村より請地し、宝暦4年(1754)、横田村の横田屋甚右衛門が引っ越して始まったと伝える。

片原横町……廃城後、藩臣の屋敷跡地と鴨島村からの請地を併せて町立された。片原町の横に隣接する。

蓮光寺門前……蓮光寺の門前にできたことによる。高岡町には門前町が2町あり、当町と教恩寺下町であった。蓮光寺は井波瑞泉寺(親鸞聖人の連枝寺で大谷派)の下寺で、教恩寺は伏木勝興寺(連枝寺で本願寺派)の下寺であった。

教恩寺下町……教恩寺の西側にあった。

神主町……山王社、熊野社などの神官が居住した。当町と上関村にまたがる一区画に高岡関野神社の前身の熊野社・稲荷社・加久弥社と、八幡社、山王社等が集まっていた。

鴨島下町……鴨島町の南西にできた町。

母衣町……^{ほろまち}縄手中町・縄手下町とともに、射水郡領家開発

村(開発村)領を請地して、文政7年(1824)に町立てされ、3町合わせて縄手三町と称した。母衣町の由来には、

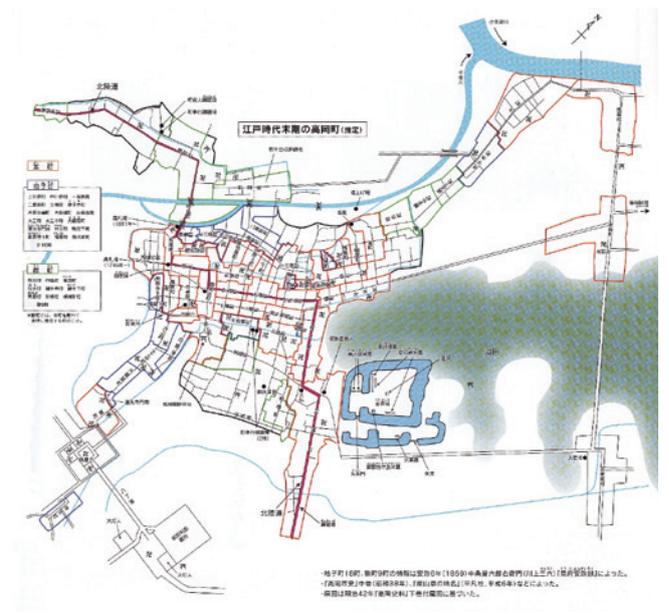
- i 母衣徒士の邸宅があった
- ii 母衣を作る職人がいた
- iii 関野神社の祭礼の際に母衣武者行列が休憩し、隊列を直して帰る習わしがあった

の3説がある。
^{のうてなかまち}**縄手中町**……ノウテとは、ナワテ(駈)の転訛で、畦道をいう。油町から地子木町の間の田んぼにそって町立てされたことから「ノウテ」と呼ばれ、縄手の字を当てた。

縄手下町……地形上、縄手中町の下手にあたる。

宮脇町……安政2年(1855)、下関村から請地して成立。堀上町の関野神社に隣接する。

新横町……安政2年(1855)、旧高岡御旅屋の北側に接する御林地と下関村の林野を請地してできた。新しく開いた横通りの町である。



江戸時代末期の高岡町(推定)
「高岡ものがたり」所収

平成24年12月27日、高岡商工会議所の「高岡の旧町名復活を推進する会」と復活に積極的な4自治体(平米町、坂下町、袋町、地子木町)が、円滑な町名変更に向けた支援を求める要望書を高岡市へ提出し、同27年4月20日には、このうち2自治会(平米町・袋町)が旧町名復活を果たすこととなった。

(文責・晒谷和子 2013年2月)

2022.02.25 発行